

# 東大病院だより

表題：海野濤山書

No. 50

## CONTENTS

- ◆ 東京大学医学部を辞任するにあたって ..... (桐野) ..... 2
- ◆ 教授就任挨拶 ..... (黒川) ..... 4
- ◆ 東大病院だより 50号記念特集 ..... (加我) ..... 5
- ◆ ナースの誕生 —制服と制帽の歴史の変遷— ..... 6
- ◆ これはどこか、これは何か —東大病院の探検— ..... 7
- ◆ 各科の歴史的映像や音声の記録の目録 —第1回 手術部 ..... 8
- ◆ 東大病院創立150周年に向けて  
第8回—ドイツへの官費留学、各科の20代の教授誕生 (その1)— ..... (加我) ..... 9
- ◆ 東大病院を支える “予約電話のオペレーション” ..... 11
- ◆ 東京大学手術部50周年記念式典 ..... (重松、上寺) ..... 12
- ◆ 第1回 AED (自動体外式除細動器) インストラクター養成講習会 ..... 14
- ◆ キワニストール贈呈式 ..... 14
- ◆ 出来事 ..... 15
- ◆ 東大病院の四季 ..... 16

## 東京大学医学部を辞任するにあたって



脳神経外科

桐野高明

このたび東京大学を辞し、国立国際医療センター研究所に所長として勤務することとなりました。東大在任中はお世話になりました。紙面をかりて御礼を申し上げます。私が東大に勤務したのは、卒業後の非常勤医員や助手であった時期を除くと、平成2年10月から12年と9ヶ月になります。東大医学部を辞するにあたり、この12年余りの変化を振り返り、これからの東京大学医学部、特に東大病院に期待することについて述べたいと思います。

昨年の10月、東京大学広報誌「淡青」は「東京大学附属病院—大きな変革期を迎えた医療の現場」という特集を掲載しました。この記事は別に青い表紙で別刷として配布されましたので、読んだ方もおいでになるでしょう。読まれた方は、東大病院の雰囲気随分変化して来たことに気づかれたことと思います。実際私が赴任をした平成2年のころからの東大病院は激変をしたと言ってもよいでしょう。別の病院になったと言っても過言ではありません。

まず建物が大きく変わりました。昭和62年に中央診療棟Ⅰ期が完成して以降、平均6年ごとに大きな建物が建てられたこととなります。平成18年に全てできあがりますと、赤門方向から見て右半分の病院キャンパスは完成となり、診療系の全ての建物がほぼ完全稼働状態となることのできるのです。病院の運営システムも大きく変化しました。東大のみならず、全国の国立大学病院は医療費の包括払い制度

(平成15年)、初期臨床研修の必修化(平成16年)、そして国立大学の法人化(平成16年)と大きな変化の波をくぐってきました。法人化が東大病院に取ってどのような影響を及ぼすのか、その評価にはかなりの時間が必要でしょう。しかし、法人化によって病院の財務上の運営が受けた影響は深刻です。病院運営の権限をこれまでの各科別から病院長に集中し、病院長には経営、医療安全、広報などの面でスタッフを配することにしたこと、病院の診療業務に主として専念する教員の他に研究に主力を置く教員の活躍の場として寄附講座を拡大したこと、各科への教員の配分の流動化を再度おこなったこと、など枚挙に暇がないほどの改革が行われてきました。

このように、東大病院の歴代病院長をはじめとする方々のご努力で、東大病院がさらに発展する基礎ができつつあると言えます。しかしながら、安閑とはしてられない問題が沢山あります。東大病院は「安全・安心の医療」をスローガンとして良質で信頼できる医療を実現していかねばなりません。いうは安くおこなうに難しいことで、日々の努力が必要です。経営面でも全く油断ができません。法人化後に課せられた毎年2%の経営改善係数は、国立大学病院の命を取りかねません。病院の新築を次々におこなったために、財政投融资の累積債務は1000億円近くになりました。年間医療収入の3.5倍以上ですから恐ろしい金額です。教育・研究に関する運営費交付金は毎年1%づつ削減されていきます。なにしろ、2005年度の国の予算の総額は82兆円、その内税収が44兆円しかなく、残る38兆円は国債発行に依存するという財政状況です。確かに先進諸国のなかで、高等教育に対する公費投入額、国民医療費の総額はいずれも圧倒的に低く、その増額が必須であることは確実ですが、しかしそれは容易には実現できないでしょう。そうすると、経営を安定化させ、現在の財政レベル

で最大の活性化を図ることが、現実的という他はありません。

このように、近未来の東大医学部、附属病院の経営の目標を描くことは可能となってきました。要するに第一には安全・安心の医療を本格的に実現すること、第二には縮小する公的予算に対抗して、その減少速度を上回る経営改善を図りつつ、病院の力を強化しつつ、決して短期間のうちに経営面で白旗を掲げるようなことをしないことが目標となります。第一の目標の達成にはシステムの整備が必要です。昨今の医師や医療に対する社会の要求を見聞きするたびに、医は聖人の道であると要求しているように聞こえます。とは言っても、聖人の道を歩くのは困難であり、特別で例外的な人物を除くと道半ばで力尽きたり、道ならぬ道に踏み込んだりすることが大部分でしょう。要するに実現不可能の課題をつきつけられて、逃れようがないという状態なのです。ところが、医はあまねく行き渡るべき行為であるとされていますので、そのような歩留まりの悪いことでは困ります。私は、これを助け、平凡な我々でも聖人の道に近い道筋を辿って行けるようなシステムが必要であると思います。第二の目標の達成には、種々の智慧が必要です。従来から提案されてきた経営改善のための項目はすでに出し尽くされ、マニュアル化しつつあると言えるでしょう。大学病院のように採算上不利な面があり、種々の規制も多いなかで、経営改善を可能とするためには、従来の枠を破る収益が必要で、その実現をはかる必要があるでしょう。

しかしながら、そのような短期的な努力の中で、これまで東大医学部、附属病院を持っていた良い面が長期的には失われて行く心配があります。従来から、指導的立場に立てる医師や医学者、優れた研究者の養成が東大医学部や附属病院の社会から課せられたミッションであるとされて来ました。その基本的ミッションが経営効率を維持しながら、従来以上に果たせるのか、次の世代がこれまで以上に育ってくるのか、それが問題です。もしそのミッションが果たせ無く

なり、ひたすら収支の均衡をめざす平凡な運営体となったとしたら、長い年月が経った後に、さらに社会の支持を受けることができるのでしょうか。

私が東大医学部にいた期間は長くはありませんでしたが、また非常に短くもありませんでした。その期間に、ここにはすばらしい可能性を秘めた若い人たちが沢山いることを実感しました。この方たちが途中で朽ちることのないような、医学部そして附属病院になって欲しいと思います。そうでなければ、学問は育たず、また心も育たないでしょう。東大医学部、附属病院のますますの発展を祈りつつ、ここで筆をおくことにします。

### 略 歴

- 昭和47年 3月 東京大学医学部医学科卒業
- 昭和47年 6月 東京大学医学部附属病院研修医（脳神経外科）
- 昭和48年 5月 茨城県立中央病院脳神経外科
- 昭和49年 6月 水戸済生会総合病院脳神経外科
- 昭和49年 9月 総合会津中央病院脳神経外科
- 昭和49年12月 東京警察病院脳神経外科
- 昭和52年 5月 東京大学医学部附属病院医員（脳神経外科）
- 昭和54年 4月 東京大学医学部附属病院助手（脳神経外科）
- 昭和55年 7月 東京大学医学博士学位授与
- 昭和55年 9月 米国国立衛生研究所（NIH）留学
- 昭和57年12月 帝京大学医学部脳神経外科講師
- 昭和61年 4月 帝京大学医学部脳神経外科助教授
- 平成 4年10月 東京大学医学部教授（脳神経外科）
- 平成11年 4月 東京大学大学院医学系研究科長・医学部長
- 平成15年 4月 東京大学副学長（平成17年 3月まで）
- 平成16年 4月 国立大学法人東京大学理事・副学長（平成17年 3月まで）
- 平成17年 7月 国立国際医療センター研究所長

## 教授就任挨拶



血液・腫瘍内科  
黒川 峰 夫

このたび7月1日付けで血液・腫瘍内科を担当することになりました。

血液・腫瘍内科では、白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの造血器悪性腫瘍から、骨髄異形成症候群や再生不良性貧血のような造血不全疾患、さらに溶血性貧血や特発性血小板減少症など免疫学的機序による造血障害に加えて、骨髄増殖性疾患など多岐にわたる血液疾患の診療を行っています。常時50人前後の患者様にご入院いただいております、外来では年間約10,000人の患者様を拝見しています。当科では、これらの患者様に安全で安心していただける診療、科学的な根拠に基づいた医療、そして個々の患者様に最適な治療を実践することを目標としています。

血液疾患の領域では、基本的な身体診察、検査データの解釈、末梢血・骨髄像の評価が診断の土台になるのはもちろんですが、それに加えて、細胞表面抗原による腫瘍細胞の同定や、分子生物学的手法を用いた疾患関連遺伝子の検出や定量が、日常診療に不可欠なものとして活用されています。また血液疾患が多岐にわたると同様に、それに対する治療法も多彩です。抗がん剤による化学療法、造血幹細胞移植、放射線療法、サイトカイン療法、免疫制御療法、輸血療法などから最適なものを選択して、あるいは組み合わせ、治療に当たる必要があります。また難治性感染症や移植片対宿主病（GVHD）などの合併症が起こることも多く、適切な抗菌剤や免疫抑制剤の投与などによって十分な対処をする必要があります。このような集学的診療は、関連する多くの診療科・部からご協力をいただいて成り立っています。今までも当科は、各診療科はもとより、検査部、輸血部、放射線部、感染制御部、薬剤部などの中央診療部とも密接な関係を持って、診療を行ってきました。また造血幹細胞移植では無菌治療部との連携のもと、一体となって診療に従事しています。今後は、これらの各診療科・部とさらに緊密な協力体制を築いて、高度な専門性を備えた全人的医療を実践していく所存です。

血液疾患の領域の診断・治療の進歩はめざましく、少し前まで標準的と考えられていた診療が、新たなエビデンスで塗り替えられるということがまれではありません。先進的医療についても、血液領域ではすでに移植医療、抗体療法、分子標的療法など多数のものがああります。さらに今後は、血液疾患発症の原因解明、それに基づいた根本的治療の確立に向けて前進することが重要と考えています。私たちは学内倫理審査委員会のご承認をいただき、患者様のインフォームド・コンセントのもと、HLA 不一致移植、脾癌に対する造血幹細胞移植などの臨床開

発研究を行っています。このような研究により、移植医療の発展が実現すれば、さらに多くの患者様に最善の医療を実践することができます。また造血器悪性腫瘍の発症に関連する遺伝子を解明する研究も行っています。これらの研究によって造血器悪性腫瘍の原因が遺伝子レベルで解明されれば、新たな治療法の開発や治療反応性の予測につながり、個々の患者様の病態に応じた最適な治療法の選択が今まで以上に可能となります。私たちはこのようなトランスレーショナル・リサーチの重要性を十分に認識し、そのような研究を通じてより高度で良質な医療を実現することをめざしています。今後も血液疾患の治療をめざし、患者様の負担と苦痛を取り除けるよう、誠実に努力を重ねていきたいと考えています。もちろん、これら全ての臨床・研究活動は、安全で安心できる医療の上に成り立ちます。血液・腫瘍内科では悪性腫瘍の診療を行う機会も多く、抗がん剤や輸血などの治療法も頻繁に行われます。このような診療においては、とくに高度なリスク管理が求められるとともに、丁寧な対話や精神的なケアも重要となります。高い安全性と倫理性に立脚し、常に患者様本位の全人的医療を行うことを、より一層進めていきたいと考えています。

大学、病院を取り巻く環境は大きな変革期を迎え、社会からの要請、期待も大変高まっています。医療における高い倫理性と安全性はもとより、医療経済、高度先進医療、研修必修化、専門医育成など、多くの点で新しい時代にふさわしい対応が求められているように思われます。このような時にこそ、私たちは教室員一同力を合わせて、血液疾患の克服という目標に向かって一歩ずつ着実に進み、患者様にご納得いただける暖かい医療を実践できるよう努力したいと存じます。今後とも、皆様方のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

### 略 歴

平成2年3月	東京大学医学部医学科卒業
平成2年6月	東京大学医学部附属病院内科研修医
平成3年4月	東京大学大学院医学系研究科第一臨床医学入学
平成7年3月	東京大学大学院医学系研究科第一臨床医学卒業
平成7年4月	東京大学医学部附属病院第三内科医員
平成7年7月	東京大学医学部附属病院輸血部非常勤医員
平成9年4月	日本学術振興会特別研究員
平成11年6月	東京大学医学部附属病院血液・腫瘍内科助手
平成16年1月	東京大学医学部附属病院血液・腫瘍内科講師
平成17年7月	東京大学大学院医学系研究科血液・腫瘍病態学分野教授 東京大学医学部附属病院血液・腫瘍内科科長

# 東大病院だより 50号記念特集

東大病院だより編集委員会委員長  
**加我君孝**

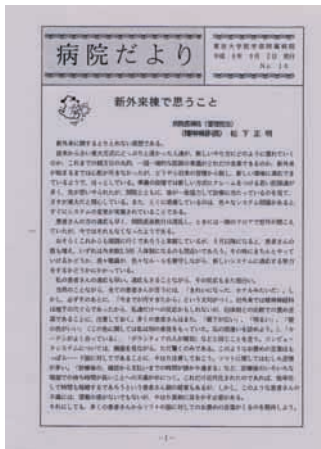
東大病院だよりは平成5年武藤徹一郎病院長（第1外科教授）が病院の財政問題を職員へ伝えることを目的として発刊されました。第1号の印刷はゼロックスコピーで4ページでありました。武谷雄二病院長（産科婦人科学教授）の時に平成12年の29号よりカラー化されました。それと共に編集の方針は東大病院の広報紙として病院が直面する問題、人事など

の動きの他に、歴史、出来事などを取り上げています。印刷部数は2,000で配布先は職員、関連病院、国立大学附属病院、名誉教授の他に東大病院外来診療棟と入院棟Aの1階ロビーで配布されています。病院ホームページにもカラー化以後のバックナンバーが掲載されています。

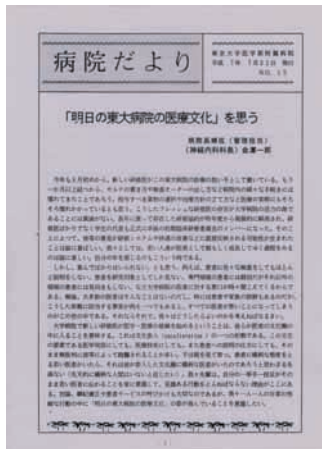
本号は50号を記念して、特集記事を組みました。



No. 1 平成5年5月25日発行



No. 10 平成6年9月2日発行



No. 15 平成7年7月31日発行



No. 22 平成9年7月25日発行



No. 29 平成12年1月1日発行



No. 33 平成13年3月7日発行



No. 35 平成13年10月20日発行



No. 37 平成14年5月31日発行



No. 39 平成14年11月30日発行



No. 43 平成15年10月20日発行



No. 46 平成16年8月16日発行



No. 47 平成16年11月15日発行



No. 49 平成17年4月25日発行

## ナースの誕生 — 制服と制帽の歴史的変遷 —

### ナースの発祥

我が国で初めて女性が看護にあたったのは、戊辰戦争（慶応4年～明治2年）の時、明治政府が設けた横浜病院で英国人医師のウィリスが活躍の中心であった。この病院は東大病院の前身となる東京下谷の“大病院”に移転した。一人一人の患者に看病婦がついた。年齢は40歳以上の女性という規定であった。明治9年に現在の本郷に東京医学校医院を開院した。この年初めて看護婦が採用された。

東大では官立における近代看護婦教育として、明治20年（1887）英国人アグネス・ウィッチを教師として迎えて始まった。教育期間は1年で第1回生は28名であった。教育はウィッチの他に、内科の三浦謹之助と外科の芳賀栄次郎があたった。この時代の6回生に“碧川かた”がおり、その長男は詩人の三木露風である。露風は母の“かた”が昭和2年に女権擁護会の機関紙「女権」を発刊した。それに



アグネス・ウィッチ（写真中央）

「あたたかき心をもてるたらちねの  
母にまこと力ありけり」

をよせている。

これより前、私立の看護婦教育のために後の慈恵会医科大学創立者の高木兼寛が明治17年（1884）に築地の新栄女学校で教えていた米国の女性宣教師マリー・L・リードを招聘した。有志共立東京病院に明治18年（1885）に第1回看護婦見習い13名を採用して始まった。

### ナースの服装と制帽

明治23年（1890）の卒業写真を見ると、服装はワンピースで長袖丸襟、ウエストにベルト、履物はぞうり、キャップはない。明治29年（1897）に制服制帽の規則が定められ、円形、山形の帽子とワンピース形の肩のタックはない制服である。明治43年（1910）にキャップは芙



明治39年の三等看護婦



明治43年の制帽。芙蓉の花をかたどったもの。大正、昭和の初めまで



昭和12年の制服、制帽、履物

蓉の花をかたどったものに変った。戦後の昭和26年（1951）看護婦の養成が新制度を迎えた年、キャップは扇形になる。平成12年（2000）新入院棟が完成するのを待って、新しく活動的な看護師の制服が検討された。キャップは廃止し、制服はワンピースとパンツタイプを選べるようになっている。左肩に The University of Tokyo の名が刺繍されている。なお、「看護師」という呼称になるまで「看護婦人」「看病人」「看病婦」「看護婦」と変遷があった。なお、写真に見るヘアスタイルや服装はその時代を反映していることがわかる。

### 芙蓉の花について

看護部の親睦会は忍ヶ岡芙蓉会という。古代中国では“はす”の異名で“はす”に匹敵するその美しさが称えられてきた。夏秋に大型の紅または白の花を開く。芙蓉峰という富士山のことである。なお平成19年（2007）は東京大学医学部創立150周年を迎えるが、東京大学で看護教育が始まって140周年の記念すべき年にもあたる。しかしすでに看護学校が2002年に廃止されたのは残念なことである。



太平洋戦争始まる。白衣にもんべ姿の看護婦



戦後、昭和27年の一年生の戴帽式



昭和35年の手術室  
手洗いナース

### 参考文献

1. 看護のあゆみ — 明治・大正・昭和を通して — 発行 東京大学医学部附属病院看護部 平成3年（非売品）
2. 慈恵看護婦教育百年史。発行 東京慈恵会 昭和59年（非売品）

（加我君孝）

## これはどこか、これは何か

### — 東大病院の探検 —

東大病院は新旧さまざまな建物からなる複合体である。古い順に南研究棟・大正14年（1925）、第1研究棟・昭和3年（1928）、東研究棟・昭和3年（1928）、内科研究棟・昭和4年（1929）、管理、研究棟・昭和9年（1934）、旧中央診療棟・昭和29年（1954）、中央病棟・昭和39年（1964）、入院棟 B・昭和43年（1968）、新中央診療棟・昭和62年（1987）、新外来棟・平成5年（1993）、入院棟 A・平成12年（2000）。

東大病院だより編集委員会では、これまで東大病

院の全貌を知るべく、隅から隅まで調査してきたが、その歴史的な建造物に謎は多く、次から次へと新しい発見をしてきた。その紹介方法にクイズ形式で「ここはどこか、これは何か」シリーズを始める。今回は東大病院の地下を、管理課の木村チームリーダーの案内で探検した。東大病院にシェルターが隠されていると言われた謎の地下空間である。本当にシェルターはあるのか。ここに紹介する写真は一体どこにあり、何のためのものが。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

**答：**写真1は内科研究棟の地下入り口の扉を開けて入ると、坑道にも似たこのような壁はタイル張りの地下通路があり、ダクトが天井を走る。少し歩くと地下の三叉路となる。右手に折れるとさらに写真2の通路を通る。古い共同溝で、いわゆる昔のライフラインのためのものである。写真3は地上にある。この共同溝の通気孔である。この内科研究棟から管理棟につながるこの坑道のような地下通路を最も利用したのが東大病院の泥棒であったという。従って現在は鍵をかけて入れないようにしてある。写真4は南研究棟のそばにあるエネルギーセンターの地下の新外来棟、入院棟の冷暖房の巨大な装置である。巨大な地下空間にこの他に冷房のための大きなプールまである。ここから新病棟へ向かう巨大な通路があり、写真5はそこを走る光ファイバーである。写真6は第1研究棟の倉庫に保管されている竜岡門の扉の鍵の飾りである。今年東大出版会から発行された「東京大学キャンパス案内」の中に竜岡門は消えてしまったと嘆く記事があるが、頼まれて病院が保管している。

## 各科の歴史的映像や音声の記録の目録

### —第1回 手術部—

東大病院の各科には、古い映像や音声の記録が保管されています。放置すると劣化するため、デジタル画像へのコピーを作成する必要があります。2007年の東大病院創立150周年に向けて、各科にどのような記録がどのような形式で保存されているか調査

することになりました。これは MULINS（マリンス）で各科に依頼し、定まった形式で登録をお願いしております。第1回目として手術部に保管されている貴重な映像と音声記録のリストを紹介します。

### 歴史的資料（手術部）

#### 映像記録

	テーマ	記録媒体	
1	「手術」	DVD	手術部50周年記念式典のために今回、デジタル化したもの。
2	「腎移植」	DVD	手術部51周年記念式典のために今回、デジタル化したもの。
3	1965. 11. 11 op 石川外科	DVD	手術部52周年記念式典のために今回、デジタル化済
4	「動脈瘤手術」10分 木本外科 各種動脈瘤（5種）	DVD	
5	「胃の手術の実況」NHK 東大手術部から中継（特集番組）木箱入り	16ミリ	
6	左房内血栓 粘液腫摘出術 三井記念病院胸外1970. 9. 3 禁映写	16ミリ	
7	「人工呼吸」 テレビ医学研究講座 異常条件下における生命現象	16ミリ	
8	小型人工肺 木本外科	16ミリ	
9	先天性肥厚性幽門狭窄症 2外 1971	16ミリ	
10	Cleft lip plastic op 口外 1970	16ミリ	
11	顔形成術 形成外科 塩谷 1966・1967	16ミリ	
12	犬の心臓外科手術 5分	16ミリ	
13	胃癌 水野先生 編集未完	16ミリ	
14	ラビットイヤーチャンパー血栓再建 1968. 7. 7～1968. 10. 16	16ミリ	
15	超音波ドップラー流量計 2外 栗根 上野	16ミリ	
16	脳幹血管障害の病態 1969. 6. 18と7. 4（3内）	16ミリ	
17	キャビオックスII 準備と操作（東大片伊木氏）	16ミリ	
18	頭頸部領域癌の局所化学療法（耳鼻咽喉科）	16ミリ	
19	人工心臓・犬の手術（木本外科）編集残 接合済み 順不同	16ミリ	
20	サリドマイド奇形児手術 昭和38. 4. 24 日本テレビ著作権所有	16ミリ	
21	私は知りたい 脳外科	16ミリ	
22	高圧酸素療法 NHK 科学時代 1964	16ミリ	
23	ラクテートリンゲル 人間の生命 双立プロ	16ミリ	
24	「局所動注法」の未使用残フィルムほか 口外、耳鼻科 1965～1966	16ミリ	
25	手術手技 「足」の映像	16ミリ	
26	手術手技 左鎖骨上窩リンパ節郭清	16ミリ	
27	手術手技 胸部外科 1971年 三井記念病院	16ミリ	
28	光電脈拍計 3分 東大中検 梶田	16ミリ	
29	高木先生学会用（天井、無影灯など）	16ミリ	
30	東大脳外 Dr 佐野 昭和50. 10. 27 術前 Brain tumor	16ミリ	
31	ファロー氏四徴症の手術 30分 1968. 3. 8	16ミリ	
32	食道離断術 2外 杉浦	16ミリ	
33	鎖肛 2外 杉浦	16ミリ	
34	心疾患と超音波 2外 1966. 3. 30	16ミリ	
35	le chirurgien et la salle d' operation	16ミリ	
36	膵臓摘出術 140f 1967. 10. 24	16ミリ	
37	胸外 三枝先生 Fallot's op 1967. 9. 18	16ミリ	
38	手術室（日本語版）（プリント版）	16ミリ	
39	血流のラッシュ ラクテートリンゲル 大塚製薬	16ミリ	
40	シンクロトラック（コーディング）	16ミリ	
41	手術台上の「風」の実験	16ミリ	
42	鎖肛術後陰唇形成術 1970. 11. 28 2外	16ミリ	
43	胸管内頸静脈吻合術 1972. 10. 20 途中で中止 2外	16ミリ	
44	総胆管拡張症 2外	16ミリ	
45	atresia ani 術前 30f 2外	16ミリ	
46	全身麻酔による抜歯 口外	16ミリ	
47	上顎癌手術 口外	16ミリ	
48	心房内血栓 三井記念病院 1969. 2. 26	16ミリ	
49	東大耳鼻科 マーカスガン	16ミリ	
50	胸部外科 三枝教授手術 3本	16ミリ	
51	Dermoid cyst 口外 1970. 2. 4	16ミリ	
52	脳冷却による脳腫瘍手術 一部カラー	16ミリ	
53	ウルトラソニック カルジオグラフィ	16ミリ	
54	OP 室内に吹き込む煙	16ミリ	
55	乳児への麻酔挿管	16ミリ	

コメント：いずれもアナログ映像として古いものであるため、経年劣化が著しい。もし、今後、長期間保存するのであれば、デジタル化が望まれる。しかしながら、かなりのコストが発生する。

#### 音声記録

	テーマ	記録媒体
1	外科学会講演記録（仙合編）1956. 4. 30	オープンリール
2	講演記録（秋田）	オープンリール
3	木本外科 Intracardiac Surgery 1957. 11	オープンリール
4	映画（手術室）昭和32. 2. 23	オープンリール
5	心疾患と超音波 ナレーション+音楽 2本	オープンリール

コメント：いずれもアナログ情報であるため、経年劣化が著しい。もし、今後、長期間保存するのであれば、デジタル化が望まれる。しかしながら、少なからずコストが発生する。



## 東大病院創立150周年に向けて

### 第8回—ドイツへの官費留学、各科の20代の教授誕生（その1）—

官費によるドイツ留学は特別なことであった。帰国後、第4回卒業生（明治15年）の内科の青山胤道は29歳、外科の佐藤三吉は31歳で教授に就任した。しかし、それより前の第1回卒業生（明治12年）から既にこの制度は始まっていた。各学年とも成績が1～2位の者にのみ許可され、しかも帰国後は教室主任あるいは教授にするという超エリートコースであった。教授となった若き青山と佐藤は3年の短期医師養成コースの別課生を第二医院（現在の三井記念病院の土地）で教育を行った。第一医院、すなわち現在の東大病院での教育はドイツ人のお雇い教師によって行われたが、それ以外の科は日本人の教授が担当した。当時の学制の変化を簡単に振り返る。

①明治10年4月12日に東京大学が創立されると同時に医学部が発足し、現在の本郷キャンパスに大学東校（現在の三井記念病院の地）から引越して医学教育と診療を開始した。この時の臨床科は内科、外科、産婦人科、精神科であった。教育は初めはドイツ人教師が行った。②次に明治19年に勅令により帝国大学令が公布され、「帝国大学医科大学」と名称が変わった。初代の医科大学長は三宅 秀（病理学）、臨床の教授は、内科は佐々木政吉、外科・皮膚梅毒科が宇野 朗、精神科が榊 俣であった。それより3年前の明治16年（1883）1月にドイツより帰国した第1回卒業の清水郁太郎は産婦人科学を、梅錦之丞は眼科の主任であったが、2人とも若くして明治18年に死没したためベルツとスクリバが兼担した。③明治26年（1893）、勅令により講座数と内容が定められた。医学科20講座・教授16名であった。臨床は内科第1（佐々木政吉）、内科第2（青山胤道）、産科婦人科学（浜田玄達）、小児科学（弘田 長）、外科第Ⅰ（宇野 朗）、外科第Ⅱ（佐藤三吉）、眼科学（河本重次郎）、皮膚病学・梅毒学（宇野 朗）、精神病学（榊 俣）。④明治30年帝国大学の名称が東京帝国大学と改められた。この年に京都帝国大学が開設され、その後耳鼻咽喉科学は明治33年、歯科学が明

治35年、整形外科学は明治39年に新設された。

今回は産科婦人科、眼科、精神科の3つの診療科の初代教授について紹介する。

#### 1. 産科・婦人科

29歳で病死した清水郁太郎教授から34歳の浜田玄達教授へ



清水郁太郎教授



浜田玄達教授

清水郁太郎は、安政4年（1857）広島県福山で生まれた。福山藩から派遣され東京に15歳で遊学し司馬凌海のもとでドイツ語を学んだ。東大医学部の第一回卒業生となった。明治11年（1878）卒業し外科医として勤務を始めたが翌年の11月、第1回官費留学生としてドイツ・オーストリアに産科学と婦人科学を学ぶために派遣された。3年間の研修の後、明治16年帰国、講師、翌年28歳で教授に昇任した。しかしそのわずか8ヵ月後29歳で病没。そのため急遽当時ドイツで産科・婦人科を学んでいた自費留学中の浜田玄達を官費留学生とし、さらに3年間研修を延長し研修させた。帰国後の明治21年（1888）、34歳で第2代の教授となった。浜田は熊本県の里浦で生まれた。明治13年（1880）医学部を首席で卒業した。第3回卒業生であった。2年後熊本県立医学校の校長となり内科と眼科を教えた。明治17年大学同期の弘田 長（後の小児科学教授）と自費でドイツへ留学した。間もなく、初代の清水が亡くなったことが大きく運命を変えた。自費から官費留学生に変更さ

れてドイツのストラスブルグ大学で産婦人科学のフロイント教授の指導を受けた。そして帰国後直ちに産科・婦人科学の第2代教授に就任し、この領域の我が国のパイオニアとしての大きな役割を果たすことになる。

38歳の明治31年（1898）、手術中、腐敗分泌物の飛沫が左眼に入り、左側の視力障害が後遺症として残り、それまでの12年間の大学教授の継続を断念し、明治33年、40歳で退官した。その後浜田は売りに出されていたお茶ノ水の東京産婦人科病院を買い取り、浜田産科婦人科病院と改め診療に従事した。この浜田病院は現在も専門病院として名高い。駿台予備校の近くにあり東大産婦人科の関連病院でもある。晩年は胃癌のため外科の佐藤三吉の手術を受けたが、大正14年（1925）62歳で亡くなった。浜田の人となりについては「公平無私、権力に屈せず、婦人科学会を発足させた非凡なる感化力のある高德の人である」と評価されている。

参考文献：東大産婦人科学教室創立100周年記念  
あゆみ・すがた 1984年発行

## 2. 眼 科

28歳で病死した梅錦之丞講師から27歳の河本重次郎教授へ



梅錦之丞教室主任



河本重次郎教授

眼科学教室の初代教授は河本重次郎と記録されている。しかしその前に28歳という若さで亡くなった梅錦之丞が教室主任として活躍した。梅は安政5年（1858）島根県の松江に生まれた。東京大学が誕生した翌年の明治11年に第1回卒業生となった。その次の年に第1回官費留学生としてドイツへ向かった。3年の留学から明治16年に帰国すると同時に25歳の

若さで第一医院の眼科主任となった。講師という肩書であった。日本人眼科学の草分けとして活躍したが、病気のためわずか28歳の明治19年（1886）に亡くなった。梅は屈折学に詳しく、日本で最初の乱視眼の診断をしたことで知られる。銅像はなく肖像写真がある。この時代、重要な眼科医に井上達也がいる。現在のお茶ノ水駅前にある井上眼科のルーツになる人である。井上は嘉永元年（1848）徳島県松板村に生まれた。井上家は代々医を学とした。明治3年（1870）大学東校に入学し2年で卒業した。東京医学校の眼科掛、明治11年に大学でも教えると同時に別課生通学生の教授も兼任し、明治13年に医学部助教授になったが、2年後の25歳の時に大学を去った。28歳の時に私費留学でベルリンのヒルシュベルク、パリのランドルト、その他ザットレル、スネルレンを訪問した。井上眼科病院が完成したのは明治23年のことである。「疾病には休みはない」と言い、休みをとることなく仕事をしたが48歳（明治28年）に落馬事故で亡くなった。そのあとを継いだ井上達二は日露戦争に軍医として出征し、外傷と半盲の関係を研究し、物を視る大脳皮質中枢は後頭葉にあるとする画期的業績を残した。

明治22年（1889）河本重次郎が明治18年からのドイツ留学より帰国すると同時に初代の眼科学の教授に就任した。わずか27歳の時である。その後33年間、我が国の教授として活躍し、眼科学を大成させた。

参考：東京大学眼科学教室百年史 1989年発行

## 3. 精 神 科

29歳で初代の教授となった、眼科出身の榊 椒



榊 椒教授

榊 椒（さかきはじめ）は安政4年（1857）、江戸下谷で生まれた。鎌倉時代からの武家の家系であったが、父親は杉田成卿の塾に入り、蘭学を学ぶがたわら蘭書によって西洋画を研究した。その後明治になって開成所活字役、測量、

博物館の標本作りをした。

榊は明治13年（1880）卒業し第一医院（東大病院）の眼科に勤務した。第3回卒業生であった。翌年フランスのMeyer教授の眼科学4冊を翻訳発行した。眼科より精神科へ変わる転機は、東京医大学医学部総理心得（現在の医学部長にあたる）の石黒忠直による官費留学の勧めであった。明治15年（1882）1月に加藤弘之総理（現在の総長）より精神病専門としてドイツへ官費留学生として3カ年の留学を申し渡された。文部省よりベルリン大学での3カ年の留学の辞令を受けて2月には横浜より船で出発した。当時の文部省留学生は官費でもその金額は十分でなく、残された家族の生活は大変であった。ベルリン大学では精神病学の大家ウエストファールのもとで学んだ。関連諸学科として、ウィルヒュウに神経病理、神経学のエルプに電気療法、ライヘルトに脳解剖、オイレンブルクに神経学、ルーツェに神経耳科学を学んだ。

帰国の直前の明治19年（1886）、ウィーン大学、ザルツブルク、ミュンヘン、その他各地の癲狂院（精神病院）を見学し、同年10月、4年9ヶ月ぶりに横浜に着いた。1ヵ月後の11月に教授の辞令を受けた。29歳の若さであった。12月3日に精神病第1回講義を行った。この頃は精神科には外来治療はなく、入院施設、すなわち癲狂院で行われた。榊教授は明治20年（1887）、巣鴨にあった東京府癲狂病院

の医長を兼ねて5月30日に第1回の臨床講義を同病院で行った。精神医学教室も学外の同病院に置かれた。精神科の患者を第一医院に入院させることには青山胤道内科学教授の反対によって実現されなかったとされる。天皇が行啓する東京大学にはふさわしくないという理由であったという。精神医学教室が本郷に置かれるようになったのは青山胤道の死後のことである。

我が国の精神医学のパイオニアとなった榊教授は明治29年（1896）、食道癌にかかり、当時の耳鼻咽喉科学の大家で日赤部長の賀古鶴所、慈恵医大教授の金杉英五郎の治療を受けた。翌年2月に亡くなった。40歳であった。お墓は都立染井霊園にある。有志により銅像が建像され、巣鴨病院に置かれたが、現在は南研究棟精神医学教室の廊下に、2代目教授の呉秀三の胸像と共にある。呉秀三の業績の前に榊 倅の仕事は隠れがちであるがそのパイオニアとしての業績は高く評価される。なお、榊の妹の徳子は後に東大耳鼻咽喉科の初代教授となった岡田和一郎と結婚したが、兄を助け精神科の市民啓蒙活動を行った。

参考：榊倅先生顕彰記念誌—東京大学医学部精神医学教室開講百年に因んで—  
昭和62年発行

## 東大病院を支える

### “予約電話のオペレーション”

東大病院は、12時30分～17時00分（土・日・祝祭日及び年末年始を除く）の間、受診予約電話を受け付けている。担当は医事課で、15名の女性職員が担当している。最近の東大病院の外来受診数は1日3,000～4,000人で、そのうち窓口予約は70件前後、電話予約は500～600件に近く、いかにこの電話予約が重要であるかわかる。



予約電話のブースの数は15備えられている

## 東京大学手術部50周年記念式典

手術部  
重松 宏  
上寺 祐之

東京大学手術部は本邦における大学病院手術室中央化の第一号として昭和30年7月に開設された。本年は、東大手術部が開設されてからちょうど50年目にあたるので、2005年7月11日夕刻より「東京大学手術部50周年記念式典」を山上会館において開催した。式典には百余名の東大手術部関係者が参加し、50周年記念に相応しく盛大かつ内容の濃いものとなった。

記念式典は、プログラムに示すように講演会から始まり、その後、懇親会へと続いた。講演会は大会議室において重松 宏手術部長の開会の挨拶から始まった。東大手術部の歴代部長の紹介ならびに手術部の足跡の概略が述べられた。そして、手術部は大学院講座ではないものの、本年7月より東大病院「22世紀医療センター」の一環として寄附講座 医療環境管理学が開講されたことが報告された。なお、当該講座の客員助教授には司会の上寺祐之が、そして、助手には斎藤祐平が赴任した。

講演会のテーマは温故知新とし、東京大学手術部の歴史を振り返るとともに、これから歩むべき道を語りあうことを主な目的とした。そこで、まず、旧中央診療棟時代の思い出として、1960年に製作された東大手術部の紹介映画をデジタルリマスター版として復活し上映した。映画の中では、清水健太郎先生や木本誠二先生らの懐かしい映像を、当時の手術部の風景の中に見ることができた。

引き続いて、山村秀夫先生から本院手術部発足当時の思い出話や苦心談などが披露された。また、城所 侑先生からは分院手術部発足当時の貴重なお話を伺うことができた。平成13年7月に東大本院と分院の統合にともない行われた本院手術部と分院手術部の統合を、新たな観点からふりかえるとともに、東

大手術部の黎明期を手術部50年の歴史の中に位置づけることができた両先生からの貴重な御講演であった。

新中央診療棟Ⅰ期時代の思い出では、都築正和先生から新中央診療棟Ⅰ期の開設にまつわる御講演を伺うことができた。小林寛伊先生からは手術部と感染管理について感染制御学の立場からの御講演があった。さらに、斎藤英昭先生からは手術部の効率的な運用に関する御講演を、そして、新井晴代師長からは新中診Ⅰ期の思い出の御講演を伺うことができた。

今回は、特に50周年記念であるので、関連学会からのメッセージを手術医学会および日本医科器械学会の理事長からいただいた。永井 勲先生からは東大手術部と手術医学会と題して、そして、釘宮豊城先生からは東大外科と日本医科器械学会と題して御講演をいただいた。最後に、手術部医局の大原信介より現在建設中の新中央診療棟Ⅱ期の報告が行われた。なお、新中央診療棟Ⅱ期には11室の手術室が増設されるので、完成後には手術室は合計23室となる。

懇親会は東大病院 永井良三院長からの祝辞で始まった。国立大学附属病院の独立法人化にともない、病院運営をシステム化するためにも手術部の重要性は今後、益々増加することなどのお話があった。そして、幕内雅敏外科部門長からの祝辞では、現在、



東京大学手術部50周年記念式典 会場風景

平成17年 7 月11日

## 東大手術部50周年記念式典プログラム

司会：上寺 祐之

- ①講演会：午後 5 時～ 7 時、山上会館 2 階 大会議室
- 開会の挨拶 手術部部長 重松 宏
- 旧中央診療棟時代のあゆみ
- ・ 映写会（当時の映像）（15分）
  - ・ 本院手術部の発足（10分） 山村 秀夫 先生
  - ・ 分院手術部の発足（10分） 城所 侂 先生
- 新中央診療棟Ⅰ期時代のあゆみ
- ・ 新中央診療棟Ⅰ期開設（10分） 都築 正和 先生
  - ・ 手術部と感染制御（10分） 小林 寛伊 先生
  - ・ 手術部の効率的な運用（10分） 斎藤 英昭 先生
  - ・ 新中診Ⅰ期の思いで（10分） 新井 晴代 師長
- 関連学会からのメッセージ
- ・ 東大手術部と手術医学会（10分） 永井 勲 先生
  - ・ 東大外科と日本医科器械学会（10分） 釘宮 豊城 先生
- 新中央診療棟Ⅱ期に関する報告（10分） 東大手術部 大原 信介
- ②懇親会：午後 7 時～午後 8 時30分、山上会館 B1 レストラン「御殿」
- ・ 東大病院長 祝辞 永井 良三 病院長
  - ・ 外科部門長 祝辞 幕内 雅敏 教授
  - ・ 看護部長 祝辞 榮木 実枝 部長
  - ・ 乾杯の音頭 花岡 一雄 先生
  - ・ 来賓、祝辞
  - ・ 感謝状贈呈 重松 宏 部長より
- 40年以上勤続者：職員 横沢生美子
- 30年以上勤続者：看護師 大國 松子、佐々木利枝  
職員 石毛 公子、馬場のり子
- 20年以上勤続者：看護師 平山 秀子、田之上ともよ  
職員 大鹿糠文彦、中野 信広、熊田 直人  
阪本 智樹、田中 克己
- 閉会の挨拶 手術部師長 大國 松子

欧米においては臓器別センターごとに特化した手術室が作られる傾向もあるので、手術部運営には柔軟な考え方が大切であることなどのお話があった。

その後、榮木実枝看護部長からの祝辞があり、花岡一雄先生からの祝辞ならびに乾杯の音頭へと続いた。そして、来賓祝辞を石川浩一先生と高橋泰子先生からいただいた。懇親会場では終始和やかな雰囲気、旧交を温め合う場面が随所で見受けられた。宴たけなわとなるにおよんで手術部勤続20年、30年、40年の看護師と職員の方々への感謝状贈呈式が重松

宏手術部部長により行われた。さらに、講演会において1960年に製作された東大手術部の紹介映画を見逃した方々のために、この映画を懇親会場で再上映した。

最後に、手術部看護師長の大國松子より閉会の挨拶が行われ、名残惜しさがつのるなかで閉会となった。今後の東大手術部の更なる発展の重要性と必要性を全ての参加者が再確認し合うなかで、温故知新をテーマにした東京大学手術部50周年記念式典は終了した。

## 第1回 AED(自動体外式除細動器)インストラクター養成講習会

平成17年7月1日に、医学部附属図書館において第1回アメリカ心臓協会(AHA)ハートセイバー AEDコースが開催されました。本邦でも平成15年7月よりAED(自動体外式除細動器)が一般市民に解禁、医学部附属病院でも今年度中にAEDが配備されることとなり、これにあわせ附属病院の全職種の職員が、院内で心停止を来した患者様に対し、AEDを使用した適切な心肺蘇生を提供できることを目標としております。

永井良三医学部附属病院長、矢作直樹救急部長を迎え、田中行夫救急部副部長(コースディレクター)

のもと、30名のインストラクターが日本全国から参集し、医師・看護師・診療放射線技師・薬剤師・事務職員など計48名の様々な病院職員が、心臓マッサージや人工呼吸というこれまでの心肺蘇生法にAED使用を組み合わせ迅速に救命できるように、技術の習得に熱心に励みました。6時間に及ぶコースを修了し、全員がAHA認定の資格を取得しました。AED指導者は病院内の職員に対し、AED技術の指導にあたることとなります。今後継続的にコースを開催し、更なる指導者の養成と救命技術の習得・向上に、全病院一丸となって邁進していく所存です。



講習会の様子



第1回 AED 指導者養成コース修了者

## キワニスドール贈呈式

7月14日(社)東京キワニスクラブより本院小児科に、キワニスドールが贈呈されました。

キワニスドールとは綿を詰めた白無地の人形で、小児科の医師がドールの部位を指差して患者のお子さま達から病状を聞いたり治療の説明をしたりして、お子さま達から恐怖心を取り除きつつ、診察や治療をスムーズに進めるのに役立たせます。

また、お子さま達の自由な発想で顔を書いたり衣服を着せたりすることで、“自分だけのもの、自分の分身”といった親密な関係が生まれるなど、秘める可能性をもった人形です。

このちょっと風変わりな小さな人形が、普通の人形とは違った方法で病気のお子さま達に大きな力を与えています。

現在までに、東大病院をはじめ全国100以上の病院

に3500個以上のドールが贈られており、医療関係者と患者さまとのコミュニケーションにキワニスドールが役立っています。

この贈呈式には BS 朝日の TV カメラが入りました。(放送日時: 8/27(土) 13:00~14:00)



キワニスドール贈呈式

# 出来事

平成17年 4月～ 8月 7日

## 4月1日(金) 個人情報保護法施行

個人情報保護法が施行され、本院として「患者様の個人情報保護に関する本院の基本方針」(プライバシーポリシー)及び院内規則等の制定、個人情報保護に関する説明会並びに注意喚起を随時行い個人情報保護の体制を整えた。

## 4月19日(火)

### 講演会「最近のクレームの特徴とクレームの基本対処方法」

時 間：18:00～19:30  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
演 題：最近のクレームの特徴、クレームの基本対処方法  
講 師：(株)新医療総研 井手口 直子氏  
共 催：総合研修センター、外来診療運営部会、医療支援課

## 5月9日(月)

### フィンランド大使館関係者東大病院見学

フィンランド大使館関係者が入院棟A防災設備(防災センター、ヘリポート、免震設備等)を見学された。

## 5月11日(水)

### イタリアフローレンス大学関係者東大病院訪問

イタリアフローレンス大学 ロモノフ・デル・ノルデ副学長(建築学科教授)ほか関係者が入院棟A防災設備(防災センター、ヘリポート、免震設備等)を見学された。

## 5月11日(水)

### 国立台湾大学医学院附設医院関係者東大病院見学

国立台湾大学医学院附設医院 林 芳邦院長ほか関係者が大学院医学系研究科及び本院を見学された。



## 5月12日(木)

### 第10回再生医学カンファランス

時 間：18:00～19:00  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
演 題：口腔領域の再生医療  
担 当：東京大学医学研究所幹細胞組織医学(歯胚再生学)研究部門 朝比奈 泉氏  
(ティッシュ・エンジニアリング部)

## 5月13日(金)

### リスクマネジメント研修(講演会)

時 間：18:00～19:30(質疑含む)  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
演 題：医療の安全管理  
講 師：北海道大学医学部・歯学部附属病院 副院長兼医療安全管理部長 大野 重昭氏  
(医療安全管理対策室)

## 5月16日(月)

### 韓国ソウル大学附属病院関係者東大病院見学

韓国ソウル大学附属病院関係者(医師、看護師、行政職員)が看護部門を中心とし、本院を見学された。

## 5月16日(月) 患者療養指導に関するセミナー

時 間：17:30～18:30  
場 所：管理・研究棟2階第一会議室  
演 題：変化ステージモデルとその応用  
講 師：イリノイ大学シカゴ校地域医療科学 教授 Laurie Ruggiero, Ph.D.  
(糖尿病・代謝内科、総合研修センター)

## 5月25日(水)

### 中国四川省泸州医学院訪日団東大病院見学

泸州医学院附属医院 陈 君 树(ちんけいじゅ) 副院长・何延政(かえんせい) 副院长ほか関係者が本院を見学された。



## 5月25日(水)

### 講演会「化学療法中の患者様の性の悩みに関するケアについて」

時 間：17:30～18:30  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
演 題：化学療法中の患者様の性の悩みに関するケアについて  
講 師：東京大学大学院医学系研究科健康学習・教育学分野 高橋 都助手  
(外来化学療法室、乳腺内分泌外科)

## 6月7日(火)

### 平成17年度第1回感染制御セミナー

時 間：17:30～19:00  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
演 題：病院感染防止の新しい考え方ー病院空調から手洗いまでー  
講 師：東京医療保健保健大学医療情報学科 感染制御学 大久保 憲教授  
対 象：全職員  
主 催：ICT  
共 催：総合研修センター

## 6月7日(火) 第8回東大研究倫理セミナー

時 間：第I部(更新受講者対象)：17:00～17:30  
第II部(新規受講者対象)：17:40～18:50  
第III部(新規受講者必修;更新受講者任意)：18:50～19:20  
場 所：医学部鉄門記念講堂(教育研究棟14階)  
第I部 更新受講者講習会 荒川義弘(病院臨床試験部副部長)

## 第II部 新規受講者講習会

- 各種指針と医学系研究科・医学部における研究倫理審査体制  
赤林 朗(医学系研究科・医学部倫理委員会委員長)
- 研究倫理審査を受けるための手続き  
赤林 朗(医学系研究科・医学部倫理委員会委員長)
- 臨床研究における個人情報管理  
大江和彦(ヒトゲノム・遺伝子解析研究個人情報管理者、病院医療情報管理委員会委員長)

## 4 病院治験審査委員会への申請と臨床試験部の支援

大内尉義(病院治験審査委員会委員長)  
第II部 基調講演(新規受講者は必修、更新受講者は任意)  
個人情報保護と臨床研究  
山本隆一(情報学環助教授)  
主 催：医学系研究科・医学部倫理委員会、ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会、病院治験審査委員会、病院臨床試験部、病院企画情報運営部、病院総合研修センター

## 6月13日(月)

### 東大病院内に旅行代理店オープン

管理・研究棟1階(半地下階)に好仁会委託旅行代理店、(株)ツーリストサービス(東大病院内営業所)が開設され、オープンセレモニーが挙行された。  
営業時間：9:00～17:30(土日、祝日休業)  
営業所連絡先：03-3815-5411(東大病院内線) 35940  
03-5842-6141(直通)  
03-5842-6145(FAX)  
(E-mail) ts-todai@gp.knt.co.jp



## 6月23日(木) 文部科学省研修生見学会

大学院の運営管理状況等に対する文部科学省職員の知識向上のため研修生が来院し、院内(外来受付、手術室、検査部)、医学部標本室及び安田講堂の見学を行った。

## 6月24日(金) ミニコンサート

音楽大学学生および病院職員による「患者さんのための」コンサート  
第1回、外来ロビー

## 6月25日(土)

### 糖尿病の心理社会的アプローチと患者エンパワメントに関するセミナー

時 間：14:00～15:30  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
演 題：「糖尿病の心理社会的アプローチ」～エンパワメントの理論と実践～  
座 長：門脇 孝教授  
講 師：天理よろづ相談所病院 石井 均先生  
対 象：糖尿病をはじめとする慢性疾患ケアに関わる医師及び医療スタッフ(看護師、栄養士、薬剤師、検査技師、理学療法士等)  
主 催：糖尿病・代謝内科  
共 催：総合研修センター

## 6月29日(水) 第1回「防犯」講演会

時 間：18:00～19:30  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
演 題：防犯対策について  
講 師：警視庁本富士警察署、防犯係主任 市ノ渡清正巡査部長  
主 催：労働安全衛生委員会

## 7月1日(金)

### AEDインストラクター養成講習会

時 間：13:00～18:00  
場 所：医学部総合中央館(通称医学部図書館)3階333大会議室  
(詳細は、AEDインストラクター養成講習会掲載ページ参照)

**7月5日(火) 講演会「科学者の不正」**

時 間：18：00～18：30  
場 所：鉄門記念講堂  
演 題：科学者に不正行為と社会的責任  
講 師：医学系研究科医療倫理学  
赤林 朗教授  
(倫理委員会、総合研修センター、教育研究  
支援部会)

**7月7日(木)・26日(火)・29日(金)****個人情報保護対策説明会**

日 時：第1回 7月7日(木)  
18：30～19：30  
第2回 7月26日(火)  
18：30～19：30  
第3回 7月29日(金)  
18：00～19：00  
(いずれも同一内容)  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
内 容：東大病院における個人情報保護対策  
講 師：病院個人情報保護法対策 WG 座長  
大江和彦教授(企画情報運営部長)  
対 象：新規採用等により個人情報保護に関  
する講習会を未受講の医師(大学院  
生、非常勤職員及び診療従事届け者  
を含む)  
主 催：病院個人情報保護法対策 WG、総合  
研修センター

**7月8日(金)****緩和ケア診療部講演会「がんと笑い」の開催  
について**

進行悪性腫瘍の治療とケアにおいて必要な  
「笑い」について、患者さまや市民の方を交え  
て、考えることを目的に、講演会「がんと笑い」  
を下記のとおり開催された。  
時 間：18：00～20：00  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
演 題：がんと楽しくつきあう  
演 者：東大病院緩和ケア診療部 中川 恵一  
落語 古今亭 駿菊  
落語 羽太楽家 はじ鶴  
主 催：緩和ケア診療部  
共 催：市民のためのがん治療の会、ソレイユ

**7月11日(月)****東京大学手術部50周年記念式典**

時 間：17：00～20：30  
場 所：山上会館  
(詳細は、東大手術部50周年記念式典掲載ペー  
ジ参照)

**7月14日(木) キワニスドール贈呈式**

時 間：16：00～17：00  
場 所：病院長室  
(詳細は、キワニスドール贈呈式掲載ページ  
参照)

**7月14日(木)****第11回再生医学カンファレンス**

時 間：18：00～19：00  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
演 題：「皮膚の幹細胞と再生医療」  
担 当：国立国際医療センター研究所細胞組  
織再生医学研究部  
大河内 仁志先生  
(ティッシュ・エンジニアリング部)

**表紙の説明**

7～8月の不忍の池は蓮(ロータス)  
の花が早朝から午前中、大きな花を  
開く。8月の朝8時に不忍の池の蓮と  
入院棟を撮影した。

**東大病院の四季****夏の彩り  
(七夕飾り)**

盛夏の訪れとともに、様々な願い  
ごとを書いた彩り鮮やかな短冊を配  
した七夕飾りが院内に飾られこの時  
期の風物として、欠かすことの出来  
ない彩りを添えております。

今年は10本の七夕笹が用意され外  
来病棟、入院棟、小児病棟の夏の訪  
れを感じさせました。

**7月15日(金) クレーム対応講演会**

時 間：18：00～19：30  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
演 題：患者相談窓口からみた東大病院の患  
者の特徴  
演 者：帝京平成大学現代ライフ学部  
谷井淳一助教授  
対 象：全職員対象  
共 催：総合研修センター、外来診療運営部  
会、入院診療運営部会、医事課

**7月15日(金)・22日(金)****褥瘡対策に関する説明会**

時 間：第1回目：7月15日(金) 18：00～  
19：30  
(両日とも同一内容)  
場 所：臨床講堂  
対象者：平成17年4月より本院で研修を開始  
した研修医、リスキーマネージャー、  
看護部褥瘡対策フロア委員

**内 容：**

- ・「褥瘡管理の基礎知識」  
真田弘美教授(大学院医学系研究  
科・老年看護学分野)
  - ・「診療計画書の提出、DESIGNの記入等  
について」  
前川武雄助手(皮膚科・皮膚光線レー  
ザー科)
  - ・「褥瘡3度悪化時の対応、報告書の提出、  
予防方法等について」  
長瀬 敬助手(形成外科・美容外科)
  - ・「褥瘡の栄養管理」  
加藤チイ栄養士(栄養管理室副室長)
  - ・「褥瘡の悪化例・悪化を予防できた例に  
ついてのケーススタディ」  
小柳礼恵看護師(看護部・褥瘡対策  
専任副師長)
- 主 催：褥瘡対策委員会、総合研修センター、  
医事課

**7月20日(水)****インフォームドコンセント講習会**

時 間：18：00～19：30  
場 所：臨床講堂  
演 題：インフォームドコンセントに関連し  
た裁判・紛争事例について  
講 師：三宅坂総合法律事務所弁護士・東京  
大学医学部附属病院顧問弁護士  
水沼太郎 先生  
主 催：医療評価・安全・研修部、インフォ  
ムドコンセント委員会、総合研修セ  
ンター、医事課

**7月20日(水) 心臓移植に関する公開勉強会**

時 間：17：30～19：00  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
演 題：臓器提供の流れについて  
講 師：東京医科大学八王子医療センター  
櫻井悦夫ドナーコーディネータ  
主 催：臓器移植医療部

**7月28日(木) 包括評価制度(DPC)講習会**

時 間：18：00～19：30  
場 所：入院棟A 15階大会議室  
講 師：総合研修センター保険診療指導顧問  
麻生玲子氏  
主 催：入院診療運営部、総合研修センター

**8月7日(日)**

14時30分頃、深部治療棟の待合室の蛍光灯  
の安定器から煙が発生しました。直ちに消防署  
に連絡し、消防署の迅速な対応によりけが人等  
の人的な被害及び器物などへの被害もありません  
でした。



発 行 平成17年8月31日

発 行 人 永井良三

発 行 所 東京大学医学部附属病院

〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1

TEL 3815-5411

「東大病院だより」編集委員会

編集委員長 加我君孝

事務担当 東大病院広報企画部

総務課総務企画チーム庶務担当

連絡先 TEL 5800-9769

E-mail: SyomuAll@adm.h.u-tokyo.ac.jp

印刷所 株式会社 学術社

東大病院だよりは、東大病院のホームページから見るができます。 <http://www.h.u-tokyo.ac.jp/outline/letter.htm>

また東大病院だよりは、年4回発行し、外来診療棟1階ロビー、入院棟A1階ロビーのパンフレットスタンドから自由にお持ちいただけるよう情報提供を進めておりますが残部には限りのあることをご了承下さい。